

芥川賞全集

第一卷



文藝春秋

芥川賞全集 第一卷

著者

石川 達三

鶴田 知也

小田 巖夫

石川 淳

富澤 有爲男

尾崎 一雄

昭和五十七年二月二十五日 第一刷
昭和五十七年三月三十日 第三刷

定価 一八〇〇円

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五一二二一

本文印刷 理想社印刷所

付物印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

製函所 加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

目次

蒼 氓

石川達三 5

コシヤマイン記

鶴田知也 59

城 外

小田嶽夫 87

普 賢

石川 淳 109

地 中 海

富澤有爲男 187

暢気眼鏡等

尾崎一雄 235

選 評

333

受賞者のことば

367

年 譜

373

題 裝

字 丁

中 栗

田 屋

功 充

芥川賞全集

第一卷

蒼^{そう}

氓^{ぼう}

石
川
達
三

（第一回 昭和十年上半期）

新潮文庫「蒼氓」(昭和二十六年十二月発行、
昭和四十二年二月二十三刷改版、昭和五十五
年十二月四十九刷)を底本とした。

一九三〇年三月八日。

神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。

三ノ宮駅から山ノ手に向う赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車が駆け上って行く。それは殆んど絶え間もなく後から後からと続く行列である。この道が丘につき当って行き詰ったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。後に赤松の丘を負い、右手は贅沢な尖塔をもったトア・ホテルに続き、左は黒く汚い細民街に連なるこの丘のうえの是が「国立海外移民収容所」である。

濡れて光る自動車が次から次へと上って来ては停る。停るとぎしぎしに詰っていた車の中から親子一同ぞろりと細

雨の中に降り立つ。途惑いして、襟をかき合せて、あたりを見廻す。女房は顔をかしげて亭主の表情を見る。子供はいゅんと鼻水をすすり上げる。やがて母は二人の子を促し、手を引き、父は大きな行李や風呂敷包みを担ぎあげて、天幕張りの受付にのっそりと近づいて、ヘッとおじぎをする。制服制帽の巡査のような所員は名簿を繰りながら訊ねる。

「誰だね？」

「大泉、進之助でござえまし」

「何処だ？」

「ヘッ？」

「どこだ。何県だ？」

「秋田でござえまし」

所員は名簿に到着の印をつけて、待合室で待っているようにと命ずる。父は又ヘッとお辞儀をして行李を担ぎなおす。

待合室というのは倉庫であつた。それがもう人と荷物とで一杯である。金網張りの窓は小さく、中は人の顔もはつきりしない程に暗く、寒く、湿っぽい。

「此処さ待てれ」と父は言つて、行李を担いで人の中を分けて入って行くと、荷物を置く隙間を探した。大きな棚が三段になって幾列にも並んでいる。女達はみなこの棚の

上に坐っている。男達は荷物に腰かけて煙草を喫っている。妙にしんとした疎々^{そうそう}話声もしない。子供達が泣きもしない。憂鬱に黙りこくって、用もないのに信玄袋を開けて見たり、手のひらを眺めて見たりしているのだ。

行李を置いて出て来ると大泉さんはほっとして戸口に立った。ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いている。はてしもない移民の行列だ。ブラジルへ、ブラジルへ！

遠く、港が灰色にかすんで見えている。その向うには海がぼやけている。そしてその海の向うには、外国がある。

ついぞ考えて見たこともない外国という事が今は大きな不安になって胸を打つ。すると又しても故郷の山河を思い出す。故郷には傾いた家と、麦の生え揃った上を雪が降り埋めている幾段幾畝の畑と、そして永い苦闘の思い出とがある。しかし、家も売った畑も売った。家財残らず人手に渡して了った。父と祖父と曾祖父と、三つで死んだ子供と、四基の墓に思いつきりの供物を捧げてお別れをして来たではないか。

「本倉さん、まんだきや？」女房が後から問いかけた。ふりかえろうとした時に、恰度受付へやって来た一団の家族を見つけて、おう、いんま来た！と言った。彼は漸く樂樂とした微笑を浮べ、煙草を喫う事も忘れていたのに気が

ついて袂^{たもと}に手を入れながら、頑丈な大きな肩に細く光る雨を受けて受付の方へ歩いて行った。女房もやっと遣り場のない氣持を和らげられて、十三と五つとの子供達にまで「ほりゃ本倉のおんつあんが御座った！」と言った。

本倉さんとは杉の叢立^{むらた}ちを隔てて隣同士であった。彼は大阪の親戚へ寄ったので一足後れて来たのであった。彼は六人の家族を連れて、てんでに荷物をかついで、倉庫の入口に立つと愕^{おどろ}いて言った。

「おんや居だも居だも！こりゃ一隻の船さみんな乗れツかな？心細くねくてえかべどもしや」

「ンだ」と大泉さんも同感した。それから人々の間を掻き分けて何とか落ちつく場所を見つけると、知らない人達の肩のあいだに挟まって行李や包みの上に腰をかけた。人いきれがむつと臭くて、雨に濡れた着物の蒸れた匂いが鼻をついた。眼の前の棚の二段目には婆さんが坐っていて、鼻水をすすっては煙管をかちかちと叩いていた。憂鬱そうに唇を歪めて煙草を喫った。そしてぼんやりと傍に佇^{たたず}んでいる若者に向って、勝治仁丹持っただか、と言った。門馬さんと婆さんは風邪をひいているのだ。勝治は隣りの若者に向って、

「孫さ、仁丹ねえか、有ったらけれ」と言った。孫市はま

た隣りへ向いて、

「姉しゃん仁丹有ったな。出してけれ」と言った。紡績女工であつた頬の赤いお夏は、バスケットの蓋をあけた。

洋服を着た洒落た娘がマンドリンを抱いて立っている。

父親の勝田さんは革のスーツケースに腰かけて、襟に毛皮のついたインパネスを着ている。半ば白い髭があつて、でっぷりと肥えていて、物知りめいて隣りの中津井さんという熊本の男に話しかけている。

「そりゃあんだ日本とは比べものにならん。氣候はね、いつでも合服一枚で済むようなええ氣候だし、土地と言えはもうその肥えて肥えて、桑がね、桑の苗がね、植えてまる一年で以て、こう！二寸からの直径になる。わしは一つ養蚕をうんとやるつもりですがね、珈琲はもう生産過剰で行き詰りましたな。将来は果樹及び養蚕、殊に養蚕はええですよ。現在では絹物は全部輸入ですからな、ええ」

元気で喋舌^{しゃべり}っているのは此の人ばかりで、相手の中津井さんも俯向き勝ちだし、彼の多弁が却つてそのあたりの人を一種沈鬱^{ちんいつ}な不安な氣持にさせるのであつた。本倉さんは喫い尽した煙草を下駄で踏み消しながら囁く様に言つた。

「大丈夫だべな」

「うん」と大泉さんは答えた。それは体格検査の事であつ

た。本倉さんはトラホームであつた。そしてブラジル入国の移民の第一条件は（一、トラホーム患者ニ非ザルコト）である。患者はサントスの港から一步も上陸させないでそのまま送り返される。これは移民にとって最大の恐怖であつた。しかし本倉さんは郷里の予備検査で合格したからこそ来たのである。

「何としても合格せんばならんねな」大泉さんは決心を固めるようにつぶやいて大きな体を行幸の上でぎしぎしと置き直した。すると彼の後に居た麦原さんは、土の浸み込んだように黒い皺^{しわ}の寄つた顔をふり向けて立ち上つた。

「お常、こつちや来え」

十五六になる赤い襟の生々しいお常はお下げにした赤い髪を背に垂らして、父の後から人混みを分けて外に出た。外にはまだ銀色の細い雨が烟^けのように降りつづいていた。父は烏打帽を傾けて軒づたいに倉庫の裏に廻つて行つた。

ここならば誰にも見つかることはない。ただ軒滴^{のり}が光りながら並んで落ちて来るだけだ。お常は父が何をするのかを知つていた。だから父の前に立ち止ると眼を閉じ、じつと顔を上に向けて待つた。少し蒼白い弱々しい顔にしぶきの様に小さな雨の粒が冷たく落ちた。父は袂からロート眼薬の小瓶を出して、輝^{きら}の切れた大きな手で不器用な点眼をし

てやった。(何としても合格せんばなんね！)

ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いていた。三ノ宮駅に汽車が着くたび毎に、親子手を引きあい、荷物をかつぎ、ぞろぞろ下りて来るのだ。殆んど大部分の者が始めての自動車と言うもののためらいながら乗るのだ。その車の行列を横切つて、灰色に暗い雨空にりんりんとしたたましい鈴の音を響かせて、号外売りが叫びながら走っていた。ロンドン軍縮會議が恰度真最中である。朝の新聞では輕巡洋艦の艦型制限で議論沸騰し再び委員付託となつた事、アメリカは依然として大巡十八隻案を固持していると言う事、しかもこの問題をよそにしてイギリスはシンガポール要塞の工事中止声明を裏切つて工事費の増額予算を議決した事を知らしている。一方では現職文部大臣小橋一太が越鉄疑獄に連座して、辞表を出した匆々に起訴拘留された事を報じている。物情騒然として暗澹たる中に、胸を刺すような鋭い号外の鈴の音が絶えず移民の自動車の行列を突つ切つて走っているのだ。

午後十時、黄色いビルディングの中から騒がしい銅鑼が鳴り響いて来る。すると所員が受付の天幕の中から名簿を持って出て来る。倉庫の入口に立つて身動きもならぬほど詰まっているお百姓達に向つて叫ぶ。

「只今から体格検査がありますから、名を呼ばれた人は家族全部を連れてあちらの建物に行つて下さい。順番にです。荷物はそこに置いたままで宜しい。いいですか、もう一遍言いますよ。名を呼ばれた人は……」

倉庫の中は急にざわざわとして荷物をまとめて立ち上る用意を始める。所員は北海道から順番に青森、秋田、岩手と呼び上げて行つた。呼ばれて倉庫を出た者は女房を促し子供の手を引きながら、細い雨が斜に降る中を黄色い建物までぞろぞろと歩いて行く。入口を入ると暗い長い廊下が真直ぐに伸びていて、その廊下に列を造つて待たされる。先頭から順次に名を呼ばれて医務室に入つて行く。そこで上半身を裸にさせられて、背と胸とを銀色の小槌で叩かれて、次に臉の皮を裏返しにめくられて、その二つに合格すると室と寢床との番号札を渡される。それを持つて次の室へ行く。そこで当収容所に於ける生活の注意を与えられ、首からぶら下げる様に紐のついたセルロイドのサックに入れた食堂「パス」を貰う。このパスがなくては飯が食えないのだ。

廊下に並んだ人達の間では、雨に濡れた着物から発する悪臭と濡れた女の髪から発する悪臭とがむと温かくて、暗い片隅に踞まつた大泉さんは、(何としても合格せんば

なんね！と本倉さんに言うともなしに言った。すると妻原さんは今一度お常を促して洗面所に行った。そして人の居ない隙をみて又眼薬をしてやった。

「佐藤勝治……妻夏」と係員が大きな声で呼び上げた。お夏は、弟や知らぬ人達の前で妻と呼ばれるのは始めてであった。彼女は伏目になって勝治の後から医務室に入って帯を解いた。その姉の頬が林檎りんごの様に赤いのを弟は美しいと思った。

「佐藤勝治の母門馬くら。弟門馬義三。……妻の弟佐藤孫市」

孫市は名を呼んでいる所員の前を通る時叱られはせぬかとびくびくしていた。姉のお夏と勝治とは本当の夫婦ではないのだ。友人の門馬勝治を婿にして形式だけ佐藤の籍に入れたのだ。そうして（満五十歳以下ノ夫婦及び其ノ家族ニシテ満十二歳以上ノ者）を以て家族を構成しなければ渡航費補助移民の条件に合わないからだ。門馬さんは婆さんと二人の息子、孫市は姉弟。この二組が一緒になって一族という形式を臨時に作ったのだ。然し是は孫さんの智慧ではない。移民取扱海外興業会社の地方業務代理人山田さんが教えてくれた術だ。——叱られるどころではなかった。係りのお役人にとっては平凡過ぎる事である。むしろ奨励

してもいい位だ。そうすれば海外発展の成績は上り国内の人口問題も多少は助かる。海外興業会社にして見れば移民が一人でも多ければそれだけ社業しゃぎやう盛だし、地方代理人山田さんにしても自分の扱った移民については歩合が貰える訳だ。孫市よりもうまいのは物知りの勝田さんだった。彼は移民会社いみじんがしやに託して五千円をブラジルに送ってある。そして現に懷中に三千円を持っている。これだけ財産が有つては渡航費補助は貰えない。自費で行くとすれば家族八人二百円ずつで千六百元かかる。そこで考え出したのが自分の十六になる娘を親戚の青年の嫁に仕立てる事だ。相手の青年は検査前の青二才だからこの男を戸主にしてええ、戸主は無一文だから当然移民になれる。すると勝田さんは妻の父である。勝田一族は妻の母、妻の兄弟という名目で、かくて立派に船賃千六百元をまる儲けした。拓務省をベテンにかけた訳だ。

妻原さんはお常のことが気になった。しかし眼薬の効き目で（当收容所に於て療養すべし）と言うだけでひと先ずパスした。そして本倉さんは「隣りの室で待つて居れ」と言つて後廻しにされた。

後廻しにされた中に熊本から来た黒川一家があった。夫婦の間に十一を頭かしらに九人の子がある。しかもそれだけでは

移民家族にならないので親戚の十三になる女の子を入籍して連れて来た。都合十二人だ。最後の子供は生後三カ月である。規則には六月未満の嬰兒は許されないのだ。医者はこの子を見た時にはツとした。思わず、これは！と言った。

「君、ちょっと、見たまえ！」と彼は隣りに居る医者と言った。

「恐ろしい栄養不良だよ」

この子は蚤の様にぶよぶよで蒼白く透きとおるような肌の下から静脈の網目がすっかり見えていた。凋びて皺の寄った小さな顔、眠るでもなく醒めるでもなく唯ぐったりとしている表情。眼を開く力もなく声を立てて泣くことさえも出来ないのだ。

「乳を飲むかい？」と医者は吃りながら訊いた。母親は両手にこの子を抱いたままぼんやりと窓の外の雨を眺めていて返事もしない。医者は父親をふりかえった。大きな体格をした父は右の手の甲で鼻水をこすってそれを左手で揉み消している。その三人を囲んでうようと九人の子供だ。

その中の三人の女の子は頭に虱が霜の降った程にたかっていて、中の一人は頭一杯の腫物で膿が流れて髪が固まって悪臭を放つ中を虱が歩いている。二人の医者は呆れてこの

白痴のような夫婦をつくづくと眺めた。是は人間であるか獣であるか。そして毛むくじやらの熊の様に逞しい本能の姿をまざまざと見たように慄然として顔を見合わした。
(郷里の予備検査の医者は何をしていたんだろう?) そしてともかくも後廻しときめた。

体格検査の済んだ者は順々に自分達にあてがわれた室を探して階段を上って行つた。四階の第九号室、室は中央に四尺の通路を空けて、あとは両側にびっしりと十二のベッドが床のように連なっている。通路には二つの長椅子と一つの長い机。大泉さんは此のベッドの上に胡坐をかいて、大きな肩を元氣よく聳やかして女房と子供達とを見返った。合格した！それは愚痴を言いたくなつては押え押えして来た従順な女房にとつてもほっとする事だった。(移民になるのは、やんだねは!) 彼女は幾度か良人に向つてそう歎息しようとした。しかし今は漸く良人の元氣な日に焼けた顔に向つて微笑を返すことが出来た。

麦原さんの一家と門馬さんの一家とが同じ室に入っていた。他にベッドが一つだけ空いていた。大泉さんは最初に誰かに話しかけなくなつた。彼は善良な明るい顔をして言つた。

「お互えに、合格してえかつたしなあ！」

「あ、ふんといえかったしなあ！」と麦原さんが乗りだして来て言った。「おれや、娘がトラホー眼で、ほりゃ心配したし。ンだともしや、此処で治療せばえンだして」

「えかったしな。あんた秋田県でねしか？」

「青森だし。秋田さ近え方だとも」

「俺秋田県だし！」今まで鼻唄をうたって行李を片づけていた孫市が言った。

「湯沢だし」

「ほ！ 俺あ田沢だし」と大泉さんが一層元気づいて言った。それからもう打ちとけた話が糸をほぐす様にすらすらと出て来た。それは知識階級の初対面と違つて虚栄も探索も警戒も軽蔑も、一切ぬきにした急激な親しみであった。そのうえ皆が同じ目的をもつて集まつて来たのだ。言わば誰もかれもが日本の生活に絶望して、甦生の地を求めて流れて行こうとする、共同の悲哀を胸に抱いているのだ。それが一層早く皆を親しくさせるのだった。そしてこれ等の友達と親しくなつて行くに連れて、この幾日、家財整理や最後の始末やら、又は自分が精根を掘り埋めて来た田畑との別れやら旅立ちのごたごた迄、まるで自分が死んで行くかのように重苦しかった心、逡巡し、暗澹とし悄然とした心が、今になって始めて明るく揉みほぐされて行く様に思

われて嬉しかった。

ただ一人、門馬さんの婆さんだけはいつ迄たつても憂鬱だった。ベッドの上に皆に背を向けて坐つて、ベッドの縁の鉄枠に例の煙管をかちかちと叩きつけては口をへの字に歪めていた。誰も話しかける事も出来ないほど意地悪い様子だった。婆さんは風邪を引いて憂鬱である。それよりももっと癪に障るのは勝治が佐藤の籍に入った事だ。

「だからな、ブラジルさ着いたら直ぐに籍は戻すんだ。ンでねば誰も行かれねべ！」

と勝治がいくら言つても駄目なのだ。大体ブラジル三界まで行かねばならないと言うのが、勝治も義三も甲斐性が無いからだと思つていた。尤もこの兄弟は少し頭の足りない方ではあったが。

窓の下を号外の鈴の音が走り過ぎた。雨は一層細かく霧のようになつて横に流れている。港は遠く灰色にぼやけている。

「本倉さんの室、どこだしべ？」と女房が言った。大泉さんは、うむ、探して見ツかな、と言つて立ち上つた。廊下で銅鑼が鳴つた。

「何だ？」と頭の足りない義三が言った。

「あれは飯だ」と孫市が言った。「姉ちゃん飯食いに行く

べ。あの食券持ってな」

「ああ腹へった。行こ行こ」と麦原さんが女房達を促した。この女房はだらしない女で、襟が開いて乳房が見えるのも平気だし、寝そべって膝の出るのも何とも思わない女だ。食堂は一階にある。四階の三十の室からぞろぞろと廊下にあふれ出た移民達は各々の室で友達は出来たし、検査には合格したし皆めつきり明るい顔つきをしていた。口笛を吹く者もあり、階段の欄干を這る子供もある。食堂の入口に來ると制服の所員が立っていて、一々食堂パスを持っていくかどうかを調べている。そこを通過して中に入ると、飯と菜との蒸れた臭いがむっと鼻をつく。八人に一つの長い卓を両側から囲んで坐る。同室の者は誰言うもなく一緒に坐るのだった。だが食事は何とはなしに囚人の食事を思わせる。一つの皿に油揚げと菜っ葉の煮つけたのがベタリと叩きつけた様に入れてある。大皿に八人前の沢庵漬がある。八人に一つの飯櫃と茶瓶とそれっきりだ。しかし村で散々貧乏をして来た老百姓には食える。麦原さんも大泉さんも元気に何杯も食べた。

「うまくねなあ」自転車職工であった門馬義三が言った。すると向側から孫市が、「文句は言われねえべ。天皇陛下の御飯でねかよ！」とたしなめる様に言った。

「ンだんだ」と大泉さんも大きく肯いた。

だが金持ちの勝田さんには食えなかった。殊に絹の着物を着たその女房には食えなかった。彼女は良人の耳に口を寄せ肩をしかめて「十五日まで此の御飯じゃ困りますねえ。お金を出して他の料理は貰えないんでしょうか」と言った。勝田さんは、

「船の御飯はもつとまずいよ。麦飯だからな」と覺悟をきめたように答えた。

食事を終つて又四階まで上って行く時に、孫市は物に脅えたように無口でいる姉に言った。

「飯食つて直ぐ四階まん得上るのも楽でねえなあ姉ちゃん」

お夏は愛する弟の元気な顔を見てそつと微笑みだけであつた。彼女は堀川さんの事を思っていた。紡績の女工監督の堀川さん、彼女に結婚の申込みをした男のことを。(若しもあの申込みがもう一カ月早かったならば!)彼の申込みは弟が移民になるのを決心した後のことであつた。彼女は当惑して、

「少し待ってたんへ。弟さ訊いて見ねば……」と言つて返事を延ばした。けれども、自分が結婚すれば弟の家族構成は崩れる。お夏はその事を遂々弟に言わないでしまった。